東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十卷　第二號

大正九年二月一日發行

論說

資本論に見はれたる唯物史觀……法學博士　河上肇
社會的租稅政策の根本理論……法學博士　小川鄕太郎
鎌倉時代の家族制度（一）……文學博士　三浦周行
消費稅が生產者に及ぼす影響の社會政策的考察……法學博士　神戸正雄
植民地の土地政策（二、完）……法學博士　山本美越乃
交通の意義と交通論の問題……法學士　小島昌太郎

時事問題

支那の日貨排斥運動……法學博士　戸田海市

雜錄

手形交換所制度論（一）……法學士　大森研造
絹に關する外國語……法學博士　財部靜治
岡山藩の開墾策（一）……黑正巖

經濟論叢　第十卷　第二號（通卷第五十六號）　大正九年二月發行

論說

資本論に見はれたる唯物史觀

河上肇

マルクス自身の言ふ所に依れば、元と彼が『專門的研究は法學であつた』。然るに『一八四二年より同四三年の間、ライン新聞の記者として、所謂物質的利益（經濟問題）に關し議論を闘はさゞるを得ざるに至りし際』、彼は『初めて困惑を感じた』。されば一八四三年一月ライン新聞が筆禍を買うて發行禁止の命令に接するや、『ライン新聞の發行者が、筆鋒を和ぐる事に依り、之に向つて下されたる死刑の宣告より免れ得べしとの妄想を抱ける際』、彼は『寧ろ悦んで機會を捉へ、公の生活より自己の書齋に退くことゝなした』。乃ち彼は間もなく巴里に移り、其處で經濟學の研究を始めたが、暫くして當時佛國の宰相たりしギゾーの爲に追はれたるにより、彼は居をブルッセルに移し、更に其地に於て經濟學の研究を經續した。而して彼はブルッセルに轉ぜし前後に於て、

此等研究の『一般的結論』として、所謂唯物史觀なるものを得た。而して彼自ら言ふ所に依れば、其史觀たる、『一旦之を得し後は』、實に彼が『研究の指南車となりし所』のものである。(1)

此の如く、唯物史觀はマルクスの經濟學的研究の指南車となりしものである。現に彼は、資本論の第一卷となす積りにて公にせし所の、其の最初の纒りたる經濟學上の著作たる、『經濟學批判』の序言に、前記の如く其學問的研究の經過を述べたる後、之に引續きて、唯物史觀に關する彼の有名なる公式を記述して居るのである。尤も『經濟學批判』は後に不滿足の點あるを發見せしが故に、彼は其續篇を著作することを中止し、『批判』中の議論を書き改め、更に之を『資本』の第一卷として公にしたのではあるが、併し彼れの唯物史觀と經濟論との間に於ける密接なる關係は、是が爲め毫も變化した譯では無い。

勿論マルクス批評家の中には、彼れの史觀と經濟論とを全く切り離さんと企つる者もあれど、余の見る所に依れば、資本論三卷の內に盛られたるマルクスの經濟論の、理論的體系の全體の構造は、到底彼れの史觀と切り離して理解するを得ざるものである。現に資本論第一卷初版の序(2)を見る時は、

Es ist der letzte Endzweck dieses Werks, das ökonomische Bewegungsgesetz der modernen Gesellschaft zu enthüllen.

(1) 以上引用の句は、總て Zur Kritik der politischen Oekonomie の序文中より取る。
(2) Das Kapital. Bd. I. (1890). Vorwort zur ersten Auflage. S. VIII.

（現代社會の變動に關する經濟的法則を摘發することが、此著述の最終の目的である。）

とか、又は

……mein Standpunkt der die Entwicklung der ökonomischen Gesellschaftsformation als einen naturgeschichtlichen Process auffasst,……

（社會の經濟的構成の發展を一の自然史的過程として觀察せんとする所の、余の見地云々）

と言つてある。此の如く彼自ら、社會の變動に關する經濟上の法則を發見するが資本論著作の最終の目的である、と言ひ、或は、社會の經濟的構成の發展を一の自然史的過程として觀察するのが自分の見地である、と云へる以上、資本論三卷の議論が『社會の經濟的構成の發展を一の自然史的過程として觀察する』ことに依り、『社會の變動に關する經濟的法則』の一般的妥當性を發見せし所の、彼れの唯物史觀と、全く切り離して研究され得べきものであるとは、到底考へ得られざることである。乍併、余は茲に資本論に於ける、資本主義的經濟組織の批評的研究の、理論的過程及び歸結を述ぶることに依り、之と唯物史觀との關係を闡明せんと企つるものでは無い。余が此短文に於て試みんとする所は、只資本論三卷の各所に散見する所の、唯物史觀の一適用と見るべき、若干の文章の中、比較的に注意すべきものと思はるゝもの數種を拔萃し來り、其等のものをば對照し又は綜合することに依り、資本論著作の當時に於て、マルクスが唯物史觀に關し、

果して如何なる思想を有し居たるかの一斑を明かにせんとするに在る。

唯物史觀の主張する所に依れば、社會に於ける生産力の發展は、社會組織變動の根本原因である。今資本論第一卷第五章の中、勞働行程に就て論せし條下には、[1]次に記載するが如き一文がある。

『勞働手段（Arbeitsmittel—勞働具）の使用及び製造は、或種の動物に於ても既に其萠芽は存在すと雖も、そは特に人類の勞働行程に關し之が特徴を成せるものである。さればフランクリンは、人間を定義して、a toolmaking animal 道具を製造する動物なり、と謂つて居る。恰も遺骸の組織が、既に滅亡せし種屬の動物の構造を知るに、重要なると同じやうに、勞働手段の遺物は、既に崩壞せし經濟社會の構成を判知するに、極めて重要である。經濟上の時代を劃する所のものは、何が造られたかと云ふ問題では無くて、そが如何にして、如何なる勞働手段を以て、造られたかと云ふ問題である。勞働手段は、啻に人間の勞働力の發展の尺度たるのみならず、更に又、勞働が依つて以て其内に行はるゝ所の、社會的關係の指示器である。』

此一文を見る時は、『經濟學批判』の序文中にある唯物史觀の公式の冒頭の主張、即ち『人類は、

(1) Das Kapital, Bd. 1., S. 142. (英譯 p. 202.)

彼等の生活(又は生命)の社會的生産に於て、……彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入り込むものである』といふ主張は、依然そのまゝに認められてあるが、只異る所は、其より更に一歩を進めて、人間の『物質的生産力の發展階段』を劃するもの、又は『人間の勞働力の發展の尺度』たるものは、勞働手段であるといふ新たなる主張が、追加せられて居るといふ點である。

猶ほ前掲の本文の脚註として、初版には次の如き注意が加へられてあつた。

『總ての商品の中で、本來奢侈的商品に屬するものは、種々の生産時代(Produktionsepochen)の工學的比較に對して、最も意義なきものである。』

然るに、第二版には、更に次の如き脚註[2]が添加された。

『從來の歴史的記錄は、物質的生産の發展を、卽ち總ての社會的生活の基礎を、從て又總ての眞の歴史を、餘りに看過した。併し歴史以前の時代に就ては、吾人は、自然科學的の——所謂歴史的に非ざる所の——研究を基礎とし、道具及び武器の材料を標準として、石器時代、銅器時代、鐵器時代の三者に、之を分劃して居るのである。』

更に進んで、資本論第一卷の中、機械の發展を論ぜし條下を見るに、其補註[3]の中に、次の如き注意すべき文句がある。

(2) a. a. O. S. 143. (英譯 p. 200)
(3) a. a. O. S. 335., 336. (英譯 p. 406)

『ダアヰンは自然の工學に、卽ち動植物の生活に役立つべき生產具（Produktionsinstrumente）としての器官の形成に、興味を向けた。今、社會を組織せる人間の生產上の器官の形成史（die Bildungsgeschichte der Produktioon Organe des Gesellschaftsmenschen）卽ち各種の社會組織の物質的基礎の形成史も亦、同樣の注意に値せぬであらうか。而してVicoの言へる如く、人類史が自然史と分つ所以は、前者は人間の作りしものであり、後者は人間の作りしものに非ざる點にありとすれば、斯かる歷史は之を提供するに却て容易でなからうか。工學は、人間の自然に對する積極的の活動を、卽ち人間の生活（レーベン）の直接なる生產過程を闡明し、之に依りて又、彼等の社會的の生活關係及び之に發源する所の精神上の觀念を闡明する。此物質的基礎を無視するものは、宗教史と雖も、總て非批判的（unkritisch）である。宗教の雲霧的（神秘的）形成を分析して其俗世的核心を發見するは、之と逆に、各時代の現實的の生活關係より出發して之が神化の形態に及ぶより、實際遙に容易である。而かも後者のみが唯一の物質的（唯物的）研究法であり、從て唯一の科學的研究法である。蓋し歷史的過程を其範圍外に置く所の、かの抽象的なる自然科學的唯物論が如何に缺陷を有するかは、之を代表する學者が、一歩其專門外に出づるや、只抽象的且觀念的の思想を有するに過ぎざるを見れば、直ちに明かである。』

以上の一文を見る時は、『經濟學批判』の序言に載す所の唯物史觀の公式中に於ける二大主張が、卽ち人間の生産力の發展の程度に應じて社會に於ける人と人との社會關係が定まるものであると云ふこと(社會組織進化論)と、社會的の物質的生活は社會的の精神的文化の表現形式――『社會的意識の形態』――を條件づけるものであると云ふこと(精神的文化の物質的說明)と、この二大主張が、矢張り明白に其處に認められて居る。『人間の生活(レーベン)の直接なる生産過程』を明かにすれば、『之に依りて又、彼等の社會的の生活關係及び之に發源する所の精神上の觀念』をも明かにし得らるゝ、と云ふ主張が卽ち其れである。

なほ以上の一文に於て特に注意すべきことの第一は、彼が生産具の發展を以て人間の生産力の發展の最も基本的なる條件となせることである。現に彼は『社會を組織せる人間の生産上の器官の形成史』を以て、『各種の社會組織の物質的基礎の形成史』であると見て居る。さうして之と同じ思想が、前に引用せる一文の中にも、已に存在して居ると云ふことは、余の先きに指摘した通りである。

第二に、序ながら、注意すべきことは、マルクスは明白に『抽象的なる自然科學的唯物論が如何に缺陷を有するか』を認識して居たことである。世には彼れの唯物史觀を以て此種の唯物論と同一視するもの多けれども、マルクスは明白に此種の唯物論の缺陷あることを認めて居る。自然

科學的唯物論と歷史的唯物論（即ち唯物史觀）と、嚴格に之を區別しなければならぬと云ふことは、此一例によりても明かであらう。

唯物史觀に包含せらるゝ主張の中、精神的文化の物質的說明は、社會組織進化論よりも更に贊成者の少き部分であると思ふが、此部分の主張も、依然資本論に於て支持されつゝあることは、以上の引用文によりても既に明かであるが、殊に次の一文を見れば明白である。此一部は、英譯[1]では The religions world is but the reflex of the real world（宗教の世界は現實の世界の反射に過ぎない）といふ文句で始まつて居る。原文[2]には斯かる文句はないけれども、大體の趣旨は此一句によつて表現されて居ると言つても可い。即ち次の如くである。

『かの基督教は、抽象的人間に對する其禮拜と共に、殊に新教や理神教などの如き其町人的（資本家的）なる發展に於て、……商品生產者の社會に於ては、最も之に適應せる宗教の形態である。」古代亞細亞の、並に其他の古代的の、生產方法に於ては、生產物を商品と爲すことが、從て又商品生產者としての人間の存在が、單に從屬的の地位を有するに過ぎなかつた、――尤も共產制が其沒落の階段に進むに從うて、そは次第に重要なる地位を占めて來たものではあるが。されば本當の商業民族は、エピクールの神々の如く、又波蘭の社會の竅に於ける猶太人の如く、只舊世界の隙間々々に存在せしものである。勿論此等古代の社會的生

(1) Moore 及び Aveling の英譯本(1890), p. 32. Untermann 校訂譯本, p. 91.
(2) a. a. O. S. 45-46. (生田長江氏. 日本譯. 88, 89頁)

產組織は、町人的(資本家的)社會のそれに比ぶれば、遙に簡單で且透明なものではある。併しそは同時に、個々人の未熟なる狀態――自然的の種族團結に於て人々を互に結び着ける所の臍緒をば、まだ斷ち切らないで居るといふ狀態――に土臺を置いて居るか、さもなくば直接なる支配及び服從の關係に土臺を置いて居るかである。そは勞働の生產力が猶低度の發展階段に止まり居ることを條件とし、又物質的生活の過程內に於ける人々の關係が、從て又、人々相互の間及び人と自然との間に於ける關係が、之に應じて狹隘なることを條件として居る。而して此等現實の狹隘性が觀念的に反射されたものが、卽ち古代の自然崇拜敎や其他の民俗的宗敎である。」思ふに此の如き現實世界の宗敎的反射は、實際に於ける日常生活の關係が、人間同志に對する及び自然に對する、はつきり見透しのついた理性的な關係を人々に現示するやうに爲つてから、初めて一般に消え失せべきものである。社會的生活過程卽ち物質的生產過程の姿より、初めてその神秘的なる霧のヴェールが取り除かれるのは、其生活過程が自由に團結したる人々の生產物として、其等人々の意識的な計畫的な制御の下に立つに至つてからのことである。而かも斯かる狀態を實現するが爲には、社會に一定の物質的基礎――物質的存在條件の一列――が備はり居ることを必要とするのであるが、此等のものは又、一の久しき且苦み多き發展の歷史が初めて齎す所の自然生の產物に外ならざるものである。』

宗教を以て現實世界の反射となす此種の思想に對しては、恐らく反對の意見や感情が頗る強いであらうと思ふが、併し茲に注意しなければならぬことは、マルクスが斯かる場合に宗教と謂へるは、宗教そのもの、本質を指すのではなくて、『社會に於ける宗教心の表現形式』を指すのだ、といふことである。而して斯く考ふれば、何人と雖も、マルクスの主張する所に、多少の道理を認めざるを得ぬであらう。例へば伏見の稻荷明神は今日阪神地方に於ける商人等の禮拜の的となつて居るが、將來もし資本主義の經濟組織が崩壞して、萬が一社會主義の經濟組織が實現さるゝやうのことが有つたならば、投機的營利の機會と慾望とが無くなつて仕舞ふから、伏見の稻荷明神のお賽錢もおのづから減少するであらうと思ふ。私は近頃京都の市中を散歩して居た折、恵方に就ての或神社の廣告的掲示に、『集金安全』といふことが御利益の一に擧げられて居るのを見たが、斯樣な功德を有たるゝ神樣が出現されると云ふのは、明かに『現實世界の觀念的反射』が行はれた結果であろう。思はず餘談に馳せたけれども、私は今唯物史觀の批評をして居るのでは無いから、只マルクスが如何に考へたかを說明すれば可いのであつて、其當否に至つては實は問題外なのである。

資本論第一卷の第二十四章第七節『資本家的集積の史的傾向』と題する部分(1)は、資本論中最も有

(1) a. a. O., S. 726-729. (英譯 pp. 834-837.)

名なる部分の一であるが、其處には最も明白に――議論の全體に亘つて――唯物史觀の主張が應用されてある。今冗長を厭はず、試に此一節の全文を譯出すれば、次の如くである。

『資本の最初の集積は、卽ち資本の歷史的起源は、如何にして生ぜしや。曰く、そは奴隷及び農奴をば、只其形式を變じて、直ちに賃傭勞働者と爲したる場合に非ざる限り、そは直接生產者の掠奪により、卽ち自己の勞働の上に立てる私有財產の廢止により、起り來りしものである。

『社會的、團體的の財產に對立する所の私有財產なるものは、勞働手段及び勞働の外界の條件が、一私人に屬する場合にのみ成立する。然るに私有財產の性質は、件の私人が勞働者なるや又は非勞働者なるやによつて、常に相違するものである。而して一見する時は、私有財產制には無限の相違あるが如くなれども、そは皆、此兩極端の間に橫はれる狀態に過ぎざるものである。

『勞働者が其生產手段を自己の私有財產として所有し居ることは、小企業の基礎である。而して此小企業なるものは、社會的生產の發展の爲め、及び勞働者自身の自由なる個性の發展の爲め、缺ぐべからざる條件である。勿論此の如き生產方法は、奴隷制度、農奴制度、及び其他の從屬關係の中に於ても、存在したりしものである。乍併そが能く繁榮し、其全力を發揮し、相當なる典型的形態を採るに至りたるは、勞働者が彼自ら使用する所の勞働條件を

ば、その自由なる私有財産と爲せし場合にして、即ち農民はその耕作せる土地を所有し、職人はその使用に係る道具を所有し居りし場合である。

『此生産方法は、土地及び其他の生産手段の分散を前提とする。そは是等生産手段の集中を否定すると同時に、又協力、各生産過程の内部に於ける分業、自然に對する社會的の征服及び支配、社會の生産力の自由なる發展を不可能ならしむるものである。そは只、狹隘なる自然的制限を有する生産及び社會とのみ、両立し得るに止まる。之を永久に維持せんことは、正にPecqueurの言へる如く、『一般的平凡を命令する』が如きものである。然るに此制度は、或程度以上に發達すると、それ自身を崩壞せしむべき物質的手段を作り出すに至るものである。かくて社會の母胎には新たなる力と感情が發動し、而かもそは舊制度の爲に束縛を感ぜざるを得ざることゝ爲る。事茲に到らば、舊制度は崩壞されなければならぬし、又崩壞されて仕舞ふ。即ち其崩壞によつて、個人的に分散して居た生産手段は社會的に集中され、從て多數の人々の持つて居た微小の財産が少數者の持てる巨大の財産に變つて仕舞ひ、從て又、多數の人々は土地、生活手段、及び勞働具を掠奪されて仕舞ふことになるが、この多數者に對して行はるゝ恐るべき且痛むべき掠奪は、實に資本の前史を成すものである。吾々は資本の第一次的集積の方法に就て只時代を劃するものゝみを觀察したるに止れども、そは實に幾多の

悲慘なる方法によつて行はれたものである。直接生産者に對する掠奪は、最も無慈悲なる兇暴を以て、最も賤むべき、最も汚れたる、最も狹量なる、最も憎むべき感情の下に、實行された。かくて、自己の勞働によつて得たる財産にして、言はゞ各自獨立して勞働に從事せる個人と其者の勞働條件との融合の上に立脚せし私有財産は、資本家的の私有財産の爲め、卽ち只形式上に於て自由なる他人の勞働を掠奪することにより成立せる私有財産の爲め、推し除けらるゝに至りしものである。

『此の如き變革の經過が、深さに於て又廣さに於て、舊社會を十分に崩壞し了る時は、勞働者は變じて無産者となり、彼等の勞働條件は變じて資本となり、かくて資本家的生産方法は全く自己の立脚地を得ることになるが、更にそれに引續いて勞働が社會化され、土地並びに其他の生産手段が益々社會的に掠奪されて共同的の生産手段に變じて來ると、之に續いて行はるべき私有財産の所有者に對する掠奪は、遂に一の新たなる形式を採ることになる。卽ち掠奪せらるゝ所のものは、最早獨立經濟を營みつゝある勞働者には非ずして、今や多數の勞働者を掠奪し了へし資本家が、却て掠奪せらるゝことになるのである。

『斯かる掠奪は、資本の集中てふ資本家生産に內在せる法則の作用によつて、實現せらるゝ。一個の資本家は、常に多數の資本家を打ち殺しつゝあり。而して多數の資本家が此の如く僅

なる資本家により掠奪せらるゝことにより、資本の集中は次第に行はるゝと共に、他方に於ては、勞働方法に關する協力の形式、技術上に於ける科學の意識的應用、土地に關する計畫的利用、勞働手段をば總て共同的にのみ使用し得べき種類の勞働手段に變更すること、總ての生産手段をば結合的、社會的勞働の生産手段として之を經濟的に使用すること、總ての國民が世界市場の網に卷き込まるゝこと、又之に伴うて資本家的支配が國際的性質を有するに至ること、凡そ是等の現象が亦、同時に益々廣き範圍に亘つて發展するに至るものである。今斯かる變動の經過に伴ふ總ての利益を横領し獨占する資本長者の數は絶えず減少すると共に、貧窮、壓制、隷屬、墮落、掠奪の境遇に陷る者の數は益々增加し、而かも又、絶えず膨大する所の、且資本家的生産過程の裝置により訓練され、結合され、組織化せらるゝ所の、勞働者階級の反抗も亦益々增進する。資本家的生産方法は、嘗て資本の獨占と共に、又其下に於て繁榮し來れるものなるが、今やそは却て、其生産方法に對する一の束縛物と爲るに至るものである。此の如くにして、生産手段の集中と勞働の社會化とは、遂に資本家的の外被と両立し得べからざる點に達する。かくて外被は爆裂して仕舞ふ。資本家的私有財産の吊鐘が鳴る。掠奪者が掠奪さるゝことになる。

『資本家的生産方法より生ぜし資本家的の占有方法は、即ち資本家的の私有財産は、已れ自

身の勞働に立脚せる個人的私有財産の第一段の否定である。然るに資本家的生産は、自然的過程の必然性を以て、己れ自身の否定を惹き起す。そは否定の否定である。其結果は、勞働者の爲に再び私有財産を恢復するに非ずして、資本家的時代に得られたる成果——卽ち協力及び土地其他勞働によりて生産せられし生産手段の共同所有——を基礎とする所の個人的所有をば、彼等の爲に提供することゝなる。

『個人自らの勞働に立脚して居た分散的の私有財産をば、資本家的の私有財産に變更することは、事實上已に社會的となり居る生産經營に立脚せる所の資本家の私有財産をば、社會的のものに變更することに比ぶれば、勿論比較すべからざる程度に、より多くの時間を要し、より難澁にして、又痛ましき經過であつた。前の場合には、少數の簒奪者によりて國民の大多數が掠奪せられたのであるが、後の場合には、國民の大多數によりて少數の簒奪者を掠奪するのである。』

以上の一文を見る時は、『經濟學批判』の序言に載せある唯物史觀の公式中の文句、殊に、『社會の物質的生産力は、其發展の一定の階段に於て、そが從來そのものゝ內に活動し居たる所の當時の生産關係、又は只その法制上の表現に過ぎざる所の所有關係、と衝突することゝ爲る。かくて此關係は、生産力の發展形式より、變じて之が束縛となるに至る。……一の社會組織は、總て

の生産力が其組織内に於て餘地ある限り其發展を爲し遂げたる後に非ざれば、決して顚覆し去るもので無く、又新たなる、より高度の生産關係は、そのものゝ物質的の存在條件が古き社會の母胎内に孕まれ了る以前に於て、決して發生し來るものでは無い。されば人間は、常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである。何故といふに、凡て問題なるものは、一層正確に之を觀察するならば、其解決に必要なる物質的條件が已に存在し居るか、又は少くとも其成立の過程に在る場合にのみ、初めて發生するものなるが爲である』といふ文句の中に含まれて居る思想が、殆どそのまゝ茲に適用せられ居ることを、發見するのである。

以上引用したる諸文に徵すれば、マルクスが資本論の中に於て依然唯物史觀を奉じて居ると云ふことは、略ぼ明瞭であると信ずる。乍併、以上の諸文は總て資本論の第一卷より援用したるものなれば、余は更に其最後の卷より、之と同樣なる若干の文章を引用することにより、如何にかの唯物史觀が、資本論の全卷を縫うて走る所の一條の金の絲の如きものであるかと云ふことを、髣髴せしめて置きたいと思ふ。

如何なる社會組織も總て相對的、可變的のものであつて、決して絶對的、不變的のものでは無いと云ふこと、一言にして言へば、社會組織は進化するものであると云ふことゝ、且又、其社會

組織進化の主たる原因は、社會組織と生產力の發展との間に於ける矛盾衝突であると云ふこと、この二個の主張は、唯物史觀に含まるゝ社會組織進化論中の二大要素であるが、斯かる思想は資本論の殆ど到る所に於て發見することが出來る。それは既に引用した諸文に依つても明かであるが、私は更に其見本として、資本論第三卷第一分冊の中より、次の諸文を援用して置きたいと思ふ。

第三卷の第三篇は『利潤率の傾向的下落の法則』と題する有名なる篇より成り立てるものなるが、其中には次の如き文句がある。

『總資本の膨脹の率、卽ち利潤の率が、資本家生產の刺戟たる限り、(資本の膨脹は資本家的生產の唯一の目的なるが故に)、利潤率の下落は、新たに獨立すべき資本の成立を妨げ、かくて資本家的生產過程の發展を脅すの觀を呈することゝなる。そは生產超過や、恐慌や、投機や、乃至過剩の資本並びに過剩の人口を催進するものである。然るに、例へばリカアドーの如く、資本家的生產方法を以て絕對性を有するものなりと考へつゝある經濟學者は、此點に關し、此生產方法それ自體が一の制限を作り出すものなるの理を悟らず、從て此制限をば生產(生產方法の意)に歸せずして、却て(かの地代說に於けるが如く)之を自然に歸せんとして居る。けれども利潤率の下落に對して彼等の有すべき最も主なる恐怖は、實は次の點でなけれ

ばならぬ、卽ち資本家的生產方法は、生產力の發展に際して、富を富として生產することゝは何等の關係もなき或他の種類の障壁に逢着するものであつて、而かも斯かる特種の障壁の發生することは、資本家的生產方法が決して普遍性を有するに非ずして、只歷史的の過渡的の性質を有するに過ぎざるものなること、かくてそは決して富の生產に對し絕對的の生產方法たるものに非ずして、寧ろ一定の程度に達したる後は、富の發達と衝突するに至るものなることを、證明する所以である、といふ點である。(1)』

『利潤率は資本家的生產に於ける原動力にして、資本家的生產の下に於ては、利潤を擧げ得る物のみが、利潤を擧げ得る限りに於てのみ、生產せらるゝに止るのである。されば こそ從來英國の經濟學者は、利潤率の下落に對し常に憂慮を有つた。其事が可能なるべしと云ふことだけにて、リカアドーが早くも心痛したと云ふことは、彼が資本家的生產の條件に就て正に深き理解を有せし證據である。……社會的勞働の生產力の發展は、資本の歷史的使命であり特權であつた。恰も之によりて、そは無意識的に、より高度なる生產形態の爲に、其物質的條件を準備したのである。リカアドーの心痛せし所は、利潤率が、資本家的生產の刺戟が、資本集積の條件たり動力たる所のものが、生產の發展それ自身によつて脅さるゝことであつた。而かも問題は凡て數量的に明白である。リカアドーの豫想せしに止りしものは、實

(1) Das Kapital, Bd. III. Teil 1. S. 223. (英譯 vol. III. p. 283.)

際に於ては更に深き根據を有するのである。此點に關しては、資本家的思惟の範圍内に於ける純經濟的の考方よりして、即ち資本家的生産そのものゝ見地よりして、其のものゝ限界性と相對性とが、即ち其のものは物質的生産條件の一定限度の發展期に適應する所の、一の歴史的の、生産方法に過ぎずして、決して絶對的の生産方法に非ずといふことが、證明せらるゝのである。』(2)

なほ同じやうなる文句をば、第三卷の第二分冊の方から、少しばかり引用して置く

『……資本家的生産方法に就て吾人が科學的分析を爲したる結果に依れば、そは（資本家的生産方法は）特別の種類の、特定の歴史的限定を有する所の、一生産方法に過ぎざること、そは他の各種の限定されたる生産方法と同じやうに、社會的生産力の及び其發展形態の所與の階段をば、その歴史的條件として……之を前提と爲せるものなること、又この特定の、歴史的に決定されてゐる生産方法に、適應する所の生産關係――人類が其社會的の生活過程を營むが爲に、其社會的生活の創造を爲すが爲に、入り込む所の關係――は、同じく特殊なる、歴史的なる、且過渡的なる性質を有するものなること、又最後には、分配關係は其本質に於て此生産關係と同一のものにて、そは同じ物の表裏を成して居り、從て二者共に同じやうなる歴史的の、過渡的の性質を有するものなること、此等のことが證明せらるゝのである。』(3)

(2) a. a. O., S. 241-242. (英譯. vol. III. p. 304.)
(3) Das Kapital, Bd. III. Teil 2., S. 414-415. (英譯 pp. 1023, 1024.)

『勞働過程が只人間と自然との間に於ける單なる過程たる限りに於ては、其單一の要素は總ての社會的の發展形態を通じて常に同じである。乍併、是等過程の各種の特定せる歷史的形態は、之が物質的基礎及び社會的形態をば益〻擴張するに至るものである。特定の歷史的形態は、其成熟の一定の階段に達すると、そのもの、皮が剝けて、一段の向上を爲すことになる。此の如き變化の危機が到來したと云ふことは、一方に於ては分配關係、從て又、之に適應する所の生產關係の特定なる歷史的の形狀と、他方に於ては生產力、生產者の生產能力及び發展と、此双方の間に於ける撞着及び對抗が、其廣さに於て又其深さに於て、著くなることに依つて判かる。斯くて生產の物質的發展と其社會的形態との間に、一の衝突が惹起さるのである。[4]』

斯かる類のものを一々引用し來るならば、殆ど際限なきに終るであらう。故に余は、最後に次の一句を譯出して、此短文を終らうと思ふ。

『吾々が社會全體の構造に就き、その最も深い秘密、その隱れたる土臺を發見し、從て又、權力關係及び服從關係の政治的形態に就き、簡單に言へばあらゆる特種の國家形態に就き、その最も深い秘密、隱れたる土臺を發見するのは、何時でも、生產條件の所有者が直接の生產者に

(4) a. a. O., S. 420, 421. (英譯 p. 1031.)

對する直接の關係――其關係の形態は、おのづから常に勞働の方法の、從て又勞働の社會的生産力の、一定の發展階段に適應するものである――である。此事は、同一の（主たる條件に關して同一の）經濟的基礎が、――限りなく相違せる經驗的事情や、自然的條件や、人種的關係や、他の社會より蒙る所の歷史的影響や、其他の事情によりて、――其外觀の上に無限の相違と階段とを示すことをば、妨ぐるものでは無い。[1]」

右の一文の中、特に注意すべき點は、『同一の經濟的基礎』に立てる社會にても、其外觀の上には『無限の相違と段階』とを呈し得るものなることが、又此等無限の相違と段階とを生ずる原因としては、地理的事情や人種的事情や其他種々なる事情があり得ることが、マルクスにより明瞭に認められて居る、と云ふ點である。而して此點に關しては、余は嘗て『經濟的唯物的史觀』を論ずと題する一文に於て次の如く述べたことがある。[2]

『經濟的史觀（マルクスの唯物史觀を指す）は其名の示すが如く一の史觀（Geschichtsauffassung）である。故に單純なる經濟的社會觀に非ずして、一の經濟的社會變遷觀――社會に一定の變動の起る原因に就ての學說――である。されば經濟的史觀は、或社會と他の社會との間に存する人情風俗文物制度等の總ての差異の原因をば、盡く皆經濟的事情の相違に歸せんとするものでは無い。或社會と他の社會との間には、經濟的事情の外に、或は地理的事情、或

(1) a. a. O., S. 324, 325. (英譯 p. 919.)
(2) 『京都法學會雜誌』第八卷第八號、140, 141頁（通卷 1480-1481頁）

は、人種的事情に基いて、種々の方面に種々の差異を存するものであるが、經濟的史觀は敢て是等の事情に基く社會的差異を否認せんとするものでは無い。……要するに、經濟的史觀は一定の社會の變動 social changes の原因を說明せんとするもので、或社會と他の社會との間に存する差異 social differences の原因をまで說明せんと主張するものでは無い。……』

此說明は、今日繰り返して見ても、猶正しいと思ふ。從てエンゲルスが一八七四年の書簡[2]に於て、唯物史觀が歷史の一元的條件となせる經濟事情を說明して、『經濟の依つて以て運營せらるる所の地理的基礎、及び事實上その社會に猶ほ傳來せられ居る所の前時代に於ける經濟事情の殘り物、……更に進んでは其社會を外部より包擁する所の周圍の事情[3]の如き、亦總て吾々の所謂經濟的事情の中に包含せらるゝものである』と言ひ、又『かの人種なるものは又それ自身に於て一の經濟的要素たるものである』と言ひて、地理的事情や人種的事情をば皆其中に包含せしめんとしたのは、少くともマルクスの本來の趣旨には合せぬものであらうと思はれる。マルクスの唯物史觀は、獨逸も英國も、露西亞も米國も、將た日本も、總て同じやうなる歷史的變化を經過すべきである、と主張するのでは無い。經濟上の Hauptbedingungen（主たる條件）が同一であれば、社會組織の根本原則は同じことになるけれども、而かも國を異にするによつて、『經驗的事情や、自然的條件や、人種的關係や、他の社會より蒙る所の歷史的影響や、其他の事情』が『限りなく相違

（2）拙著『經濟學研究』（大正元年）421-423 頁に譯出す、そは Der Sozialistische Akademiker, 1895, S. 373. に載せるものとして、Woltmann, Der historische Materialismus. (1900) に引用する所に據る。

（3）前揭の一文に於て、マルクスが『他の社會より蒙る所の歷史的影響』と言へるものに、略ぼ相當するならん。

せる』爲に、『其外觀の上には無限の相違と段階とを示す』ことになる、と言ふのである。

以上述ぶる所によりて見れば、マルクスの資本論には全體を通じて唯物史觀の血管が通つて居ると云ふことゝ、又マルクスの唯物史觀とは如何なる內容の學說であるかと云ふことが、略ぼ想像が出來やうと思ふ。若し果してさうであつたならば、余が此の短文を起草した主意は、十分に達せられた譯である。